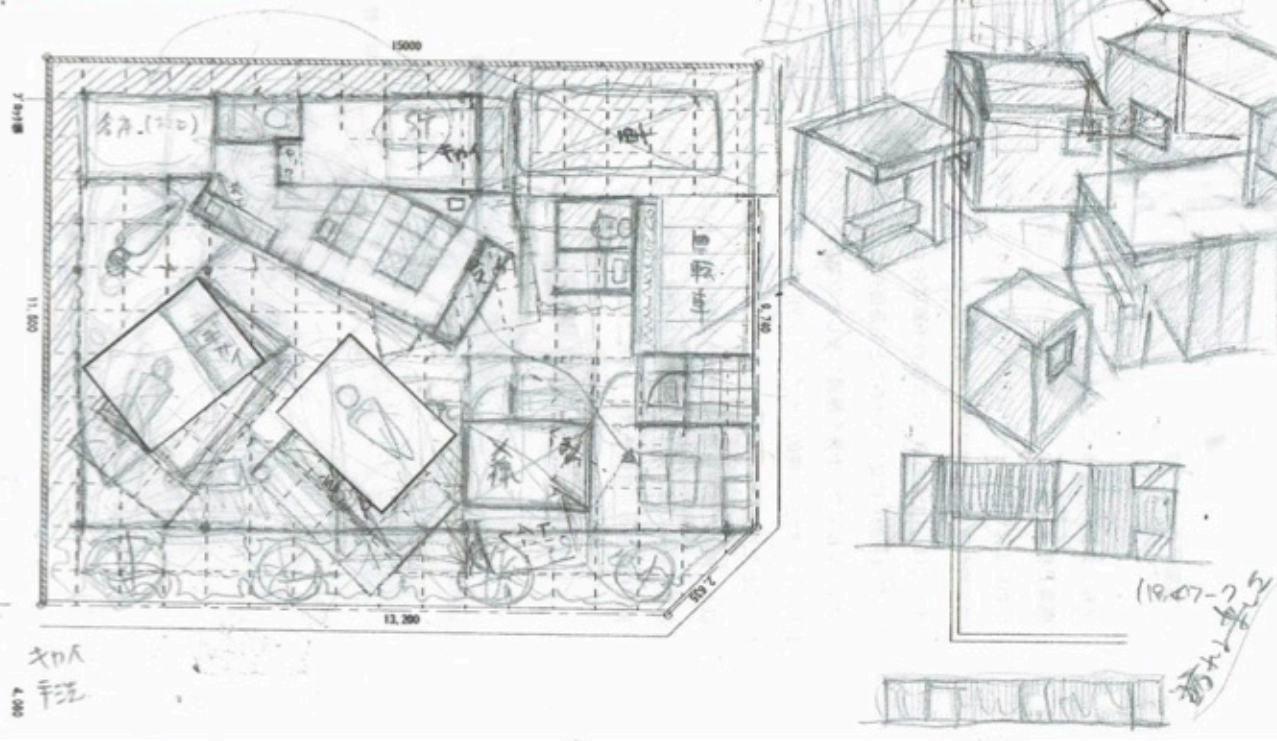


待合を少しでも広くするため、診療室のデッドスペースを削り、最小限の動線となるレイアウトの検討を重ねた。また、具現化につれて、模型もブラッシュアップしていった



なるのかなどを患者さんにしっかりと説明するための空間が欲しいと考えていました。待合にある個室は、そういったレクチャー用のスペースとして活用しています。現在は体組成計と唾液検査による健康相談会を主に開催しており、いずれは管理栄養士のスタッフも入れ、健康な方々が健康な状態のままでいられるような予防歯科を普及させていきたいと思っています」(塚口院長)

オンリーワンの外観で新たな患者を誘引する

白い箱を積み重ねたような外観は、内部空間の影響をありのままに受け入れたことによって、自然と生み出されたものである。孝啓さんは、「唯一無二とも言える外観は、塚口院長からの希望でもありました」と語る。「この形状は、内部で個室を組み合わせていった結果としてでき上がったものですが、地域の人に「なんだらう?」と思わせ、歯が痛くなった時に「面白いから入ってみよう」と思わせるインパクトを持たせる意味もあります。白を採用したのは、複雑な形状を「色」で分けるのではなく、「陰影」で見せたかったからです。白は決

して落ち着く色ではないと思います。その白をあえて用いることで気分を高揚させつつ、隙間などにつくり出した陰影を通して、穏やかな落ち着いた印象を表現できればと考えました」(孝啓さん) 美香さんも、こう付け加える。「内部空間だけを複雑にすることもありますが、今回は外からも感じられるようにしています。「面白い建物だけど、中はどうなってるんだらう?」と思わせ、実際に中に入って見て、外とつながっていることを感じて貰えたら嬉しいです」

(美香さん) 表裏一体となった建物には、開口部を設けている。孝啓さんは、「絶妙な視線制御と採光を目的にしています」と説明する。「廊下などのパブリックゾーンは、多少ならば外から見えても大丈夫でしょう。ただ、診療中の患者さんが見えてしまうことは、絶対にNGです。そういった諸条件をクリアしながら、カーテンをつけなくても良い高さで開口部をつくりました。また、季節や時間ごとに変化する外光を入り方について模型を通したシミュレーション



植栽へのライトアップに加えて、内部からの光が漏れる外観夕景。営業終了後もライトアップを続けることで、安全な街づくりに寄与する

ンを重ね、外と中とをどうつなげるかを考えながらデザインしていきました」(孝啓さん)

医師やスタッフの意識を変える「白」

塚口院長は、初めて模型を目にした時、「これが本当に自分のクリニックになるのかという喜びで、嬉しさのあまり半泣きな気持ちになりました」と言い、開業から5年が経った今も「自分にとっても、スタッフにとっても誇らしい空間になっている」と語る。「目立つ建物を望んではいましたが、具体的にどういデザインにして欲しいということまでは伝えていませんでした。模型を見せてもらった時には、本当に感激したことを覚えています。今でも、一日を通して気持ち良く過ごせる場所だと感じています。スタッフも患者さんから「こういう環境で働けて幸せですね」という言葉をいただいたことがあり、非常に嬉しく思います」(塚口院長) エントランスで掲げるサインは、一般的な歯科医院と比較して、かなりシンプルかつコンパクトなものだ。一見すると、建物として目を引くものの、歯科医院とわかる人は少ないのでは

ないだろうか。また、唯一無二とも言える外観は、前例がないことと同義であり、塚口院長が不安に感じることはなかったのだろうか。質問に対して、「繰り返しになりますが、もちろん平岡さんのデザインは素晴らしいものだったと感じています。それと同時に、僕もよく受け入れたと思います」と笑う。「例えば、床を含めた空間全体が白を基調色としていますが、多少の汚れでも目立ってしまいます。時間が経てば、なおさらのことです。だからこそ、自分がこの空間を選択したからこそ、いつまでも清潔に保っていききたいという意識を持つことにつながっていますし、スタッフにも同じ感情を持ってもらうことができます」(塚口院長)

歯科医の意志を更なる未来へ導く空間デザイン

当院は、初期設計のプランからほぼ形を変えずに完成したという。塚口院長は「無いものねだりですが」と前置きした上で、こうも語った。「当初、洗面をトイレの外にそれぞれ用意してもらった案をいただいたのですが、私の意向でトイレの中のみにもしてもらいました。今になって、

両方あった方がやはり便利だったのではと感じています。また、ロッカールームがあれば十分だと考えていたスタッフルームをもっと広く取っていたら、スタッフの働き心地も上がったのではと思います」(塚口院長) 塚口院長は、自身のクリニックのこれからについて、こう夢を述べた。「患者さんも増え、4年目には予備の個室にも診療台を入れ、マイクロスコープを3台も導入することができました。これらの夢は、勤務医の頃から思い描いていたもので、40歳までに成し遂げたいと考えていました。多くの夢を達成できた背景には、この建物の存在があると実感しています。今後は、保険診療のレベルを更に上げると共に、自費診療に関しても患者さんにしっかりと納得していただいた上で向上していきたいと思っています」(塚口院長) 今では、地域の高齢者施設への訪問治療も行っているという。また、地域の環境を良くしていきたいという思いから、診療終了後も終電まで外観をライトアップしている。「デンタルIQ」を高めることで生まれ育った地域に寄与する塚口院長の取り組みは、空間がもたらす力を手に、更なる未来へとつながっていくことだろう。